

ある一日



## 朝

---

プーンプーンプーン、今朝も彼女の携帯目覚ましの音で起こされる。

本当は、あと一時間寝ていられたのに・・・。

「朝だぞ！起きなくていいのか！？」 隣でう～んう～ん言っている彼女をゆすって起こす。

これが一日の、いや毎日の始まりの光景である。

ベットから出て行く彼女の後ろ姿を見送り、布団をかぶる。あと45分だ。

部屋の壁には、LED電飾の時計が赤く光っている。時刻表示の下は気温表示、8・・・8℃かあ。

ちらちらとそのLEDを確認しながら、布団の中でうとうとしていると瞬く間に5分前、気温は8℃のままだ。

仕方なく布団を勢いよく蹴飛ばし、一気に目を覚ます。冬はこの方法に限る。

裸の体には少々刺激が強い・・・裸？

昨晚のことを思い出し、そう言えば彼女の後ろ姿も・・・。納得しながらガウンをはおり、トイレへ。

リビングからは「おはようございます！」という番組MCの声が元気よく響いている。

「おはよう」と言いながらリビングに入っていくと化粧途中の彼女がアイラインの手を止め

「あっ起きてきた、早いねえ」と鏡越しに笑顔を向けた。いつも通りの時間なのだが・・・。

朝食を食べない彼女を尻目に、昨日の残りの味噌汁に黄色く変色したキャベツを刻んで放り込み温め直す。

その間に、これも昨晚炊いた2合の米の残量を確認。今日は弁当分だけだな。

夕食のおかずによって炊いた米の残量が変わる為、朝食べないで昼の弁当にまわしてしまうのである。

今朝は、キャベツを加えた味噌汁のみ。

ささやかな朝食を済ませ、ジャーの飯を弁当箱に詰める。おかずはどうしたものか・・・。

弁当用の飯しか残ってないと言うことは、昨晚のおかずも残ってないということだ。

たしか冷凍庫にシューマイとスパゲッティの冷凍食品がはいっているはず。

思った通りそれはあったので、手早く弁当箱の空いたスペースに詰め込み再び冷蔵庫へ。

今日は月曜日である。ゴミの日でもある。

45ℓの東京都指定のゴミ袋を引き出しから取り出し、生ゴミを筆頭に各ゴミ箱の回収に回る。

寝室のゴミ箱にあるティッシュの量に辟易しながら袋をしめて、彼女に「ゴミ出してくるよ」と一言。

「外、寒いからねえ」・・・そんなこと分かっている。

「う～寒かった」

炬燵にもぐって「でしょお」「・・・」

時計を見るとそろそろ彼女の出かける時間である。

「ほら！遅れるぞ！」

「わかってる～っ、しょうがないな行くか」、しょうがないのは誰？

彼女の尻をたたいて玄関に。○×をして見送る。

後30分を切った。

朝食の洗い物をして浴室に直行。

浴槽に浸かって一息、極楽じゃ。のんびり入ってられるわけもなく、終了。

着替えを済ませ、カバンを肩からさげ廊下に置いてあるロードスポーツタイプの自転車を押して玄関を出る。

っと、この時いつもの事ながら、灰皿は消えているだろうか？ガスコンロの火は消しただろうか？と自問自答する。

結果、もう一度見て来いともう一人の自分の意見に従い、自転車を玄関扉に挟み確認に戻るのである。

転ばぬ先の杖！ 石橋も叩いて渡れ！決してもっとうではないのだから・・・。